

ピブリオバトルから読書コミュニティをつくる： 三年間の実践から見た展望と課題

著者	宮澤 優弥
雑誌名	人文学教育研究
巻	44
ページ	209-221
発行年	2017-12
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150862

ビブリオバトルから読書コミュニティをつくる

——三年間の実践から見えた展望と課題——

宮 澤 優 弥

1. 本実践報告の目的と背景

本実践報告の目的は、稿者の三年間の実践を踏まえて、国語科の授業内でビブリオバトルを行う際の展望と課題を示すことにある。

ビブリオバトルとは「本の紹介ゲーム」であり、「書評を媒介としたコミュニケーションの場作りの手法」である（谷口，2013，p. 16）。そのルール of 簡便さや自由度の高さ，何よりその楽しさから，様々な場で行われている^①。この手法は中高の国語科教科書にも採録されるようになり，学校現場での認知度も高まってきている。

稿者は平成26年度～28年度までの三年間，中学二年生を対象にビブリオバトルを教材として単元を作成し，授業を行ってきた。三年の間，実際に授業を行う中で，そして先行研究・実践に触れる中で，稿者のビブリオバトルに関する認識が特に三年目の実践の前で大きく変化した。本稿ではそれらを踏まえつつ，三年目（平成28年度）の実践を重点的に考察し，ビブリオバトルの展望と課題を提示する。展望と課題の詳細は本稿の第4節に譲ることとするが，先に展望のみを簡単に示せば，次のようになる。

展望：「簡便で短い時間でできる」ビブリオバトルを「授業開き」の方法として行うことは，生徒はもちろん，教師にとっても多様な意義を持つ活動であり，クラスや学年の読書コミュニティ^②を形成する一助になる。

なお，本実践報告の意義は先行実践と比較した際，次の二つの独創性を見取することができるだろう。一つは，本実践が「授業開き」という観点を重視した点である。管見の限り，ビブリオバトルを「授業開き」の単元に位置づけた実践は見当たらない^③。本実践はビブリオバトルという活動の新たな一面を展望として示すものになる。二つは，本実践が一人の実践者による，経時的な試行錯誤を示す実践報告であるという点である。これまでの実践報告の多くは，一回の活動に焦点を当て，その活動を丁寧に記述するという方法を取っている^④。本稿では実践を経時的に示すことで，稿者の試行錯誤から見えた展望と課題を丁寧に記述するものになるだろう。

本実践報告は次のように構成されている。第2節では，平成26年・27年度の授業内容と展望と課題を，生徒が作成した記録ノート^⑤の感想を根拠として簡潔に提示した上で，平成28年度実践の転換点となった認識を提示する。第3節では，それらを踏まえて実践した授業の授業内容を詳述し，第4節では記録ノートの感想や実践者の内省から，授業の考察を行う。

2. 平成26年・27年度の授業内容と展望と課題の提示・実践の転換点

第2節では授業内容を記述し、それぞれの年度での展望と課題を提示する。なお、授業内容を示す前に、稿者の位置と生徒の実態を示したい。

三年間の実践は筑波大学附属中学校において行われた。三年の間、稿者は二年生の国語を担当していた。二年生の国語は稿者ともう一人の教員で分担して担当しており、稿者は年間授業時数のうち三分の一相当を担当していた。

授業の対象であった二年生は三年間を通じてどの年度も、国語の学習に対する意欲は高かった。また、ビブリオバトルを行う上で必要な基本的なコミュニケーション能力を十分に有している生徒が多かった。多くの生徒が読書に親しみを持っている一方で、一人で好きな本を読むことに終始していたり、多忙な現状より中学生になってから習慣的な読書を行えていなかったりするという状況もある。学級は計5クラスであり、それぞれの学級規模は40人であった。

2. 1. 1 平成26年度の授業内容

〈期間〉9月上旬（全2時間）

〈目標〉ビブリオバトルを通して今まで知らなかった本を知り、効果的な伝え方を考える。

〈教材〉ワークシート×2、ビブリオバトルのルールシート⁶⁾、ビブリオバトルの動画⁷⁾

〈授業の展開〉

・第1時

ビブリオバトルとは何かを知る。ビブリオバトルのルールを確認した上で、実際にビブリオバトルを行っている動画を「効果的な伝え方を考える」という観点で見る。この際、効果的な伝え方や内容理解に関する問いを教師が提示し、それに答えるという方法を採用。動画で得た知識を用いながら、自身がビブリオバトルを行う際の発表構成ワークシートを作成する。

・第2時

ビブリオバトルのルールを確認した上で、四人班に別れ、ビブリオバトルの公式ルール通り一人あたり5分間の発表と2分間の質問を行う。他の人の発表を聞く際には、友達が効果的に伝えているところを中心にメモさせる。活動後、班ごとにチャンプ本を決め、ビブリオバトルをやってみて大事だと思ったことをまとめさせる。最後に選んだ本の情報を短冊に書かせ、次の授業時にクラスの選書一覧をプリントにして配布する。

〈ねらい〉

平成26年度の実践は、教師側の大きな二つのねらいを基に編成された。そのねらいの一つは、夏休み明けのクラス開きを、読書活動と関連して「楽しく」行うということであった。夏休み明けの授業を意味あるものにしたいと考えた稿者は、夏休み期間中の読書体験を活かして楽しみながらスタートを切るための方途として、ビブリオバトルを行おうと考えた。

もう一つのねらいとは、話すこと・聞くことに関する既有・既習知識の言語化を図り、夏休み以降の授業に活かすということである。平成26年度は同じ学年を担当するもう一人の教員の授業内容との兼ね合いから、稿者は話すこと・聞くことに重点をおいて指導を行ってきた。例えば、

帯単元として筑波大学附属中学校国語科（2012）『音読・暗唱三〇選』を活用していた。「自身が文学から読み取った事柄を、声の形で効果的に伝えるにはどのような伝え方が良いか」を年間を貫いて考える大きな問いとして提示し、朗読を言語活動の柱とした学習を行った。夏休み以前には主に文学作品を取り扱ったため、別のジャンルの学習を通して、夏休み前に学習したことやこれまでの既有知識を自身の方略として転移・定着させ、以降の活動に活かすために、ビブリオバトルを通して「効果的な伝え方を考える」ことを目標とした。

2. 1. 2 平成26年度の展望と課題

ここでは代表的な二つの感想を挙げ、それらを適宜取り上げながら平成26年度の展望と課題を提示したい。なお以降引用の際は、実際には存在しないアルファベットの組の名前を、分析上の仮の名前として提示することとする。

＜平成26年度A組第二時記録ノート感想＞

私は元々、幅広いジャンルの本を読むのですが、最近、あまり本を読む時間がなく、殆ど読んでいませんでした。ですが、今回、四人の班でも、全く別のジャンルの本がでてきて本の面白さを再実感することができました。

また、皆が選んできた本がどれも面白そうで、「読んでみたい」と思えるものばかりで、とても楽しかったです。これからは、もっと幅広いジャンルの本を読んでみたいと思いました。今まで、中学校の図書室は殆ど利用したことが無かったのですが、これからはいける時には行きたいと思いました。

＜平成26年度B組第二時記録ノート感想＞

本の発表だけだと楽に考えていたら、5分は長いし、まわりがうるさくて班の人が聞こえないなど難しかったところもたくさんありました。

ビブリオバトルは今日でおわりだけれど、これで考えた聞く・話すポイントは普段の発表にも活かせたらいいと思いました。

まず展望として、授業計画段階のねらいを達成することができたことが挙げられる、具体的には、A組の記録ノートに見られるように、ビブリオバトルが「本の面白さを再実感することができ」るものであり、クラス開きで楽しく行うことができるものであることを実感することができた。そして、B組の記録ノートに見られるように、「話すこと・聞くこと」のポイント（既有・既習知識）を言語化し、次の活動に活かそうとする姿を見て取ることができた。

授業計画段階のねらい以外にも、記録ノートや実践者の手応えから展望を見て取ることができた。A組の記録ノートからは、生徒の読書意欲が向上したり、図書館利用の意欲向上に繋がったりする例を見て取ることができた。そして実践者の手応えとしては、「実践を工夫すれば一時間でも実施することができる」ということを授業を通して感じる事ができた。次年度行う際には、夏休みの宿題として「ビブリオバトルの動画を各自で見ること」「人に紹介する視点でたくさん本を読むこと」、そして「ビブリオバトルの案を作ってくること」を提示し、夏休み明けの授業一時間でコンパクトに行おうと決めた。

このような展望がある一方で、次のような課題もあることが分かった。B組の生徒が語るように、一部の生徒にとっては発表時間の5分は長く、時間を余らせてしまっていた。その結果、アドリブでビブリオバトルを続けようとする生徒が出た以外にも、黙ってしまう生徒、残りの発表時間を無視して質問の時間に移ってしまう生徒がでてしまった。このことに対して稿者は、生徒の「時間いっぱい、本について、自分の考えを話すことができた」という達成感を伴う体験が第一に必要であると考えたため、次年度は発表の時間を5分から3分にし、「ミニビブリオバトル」の形にしようと決めた。

そしてこれも生徒が語るように、発表の際に教室がうるさくなってしまった。この要因は発表者を起立させて発表させたため、それぞれの声が大きくなってしまったからだと考える。そこで、次年度は発表者には座ったまま発表してもらうこと、声の大きさに気をつけるよう伝えることを課題とした。

2. 2. 1 平成27年度の授業内容

前年度の展望と課題を踏まえて、平成27年度の授業は次のように行われた。

〈期間〉7月下旬から9月上旬にかけて（全1時間。ただし、前単元の最後に宿題を提示した。）

〈目標〉ビブリオバトルを通して今まで知らなかった本を知り、効果的な伝え方を考える。

〈教材〉ワークシート×2、ビブリオバトルのルールシート、ビブリオバトルの動画

〈授業の展開〉

・第0時

夏休みに入る前の授業（前単元の最終時に相当）で宿題の提示をする。この際、「人に紹介するという視点で本を読んでもらうこと」を指示する。

・第1時

ビブリオバトルのルールを確認した上で、四人班に別れ、一人あたり3分間の発表と2分間の質問を行う。他の人の発表を聞く際には、友達が効果的に伝えているところを中心にメモさせる。活動後、班ごとにチャンプ本を決め、ビブリオバトルをやってみて大事だと思ったことをまとめさせる。最後に選んだ本の情報を短冊に書かせ、次の授業時にクラスの選書一覧をプリントにして配布する。

〈ねらい〉

前年度のねらいと同様である。前年度と同様に、夏休み明けのクラス開きを、読書活動と関連して「楽しく」行うということ、話すこと・聞くことに関する既有・既習知識の言語化を図り、夏休み以降の授業に活かすということをねらいとした。

2. 2. 2 平成27年度の展望と課題

ここでも代表的な二つの感想を挙げ、それらを取り上げながら平成27年度の展望と課題を提示する。

〈平成27年度A組第一時記録ノート感想〉

はじめてのビブリオバトルということで、なれないながらも班ごと楽しくやれたと思います。

時間内に人に何かをすすめることの難しさを実感するとともにもっともっと表現方法をみがき、自分の面白いと思う本を皆にもっともっとすすめられるといいと思いました。又いろんな人の発表を聞き表現方法がさまざまなこともとても興味深かったです。もっともっとたくさんの人の発表も聞きたいと思いました。

〈平成27年度B組第一時記録ノート感想〉

今回の授業の大半はビブリオバトルだった。相手に「読んでみたい」と思ってもらうにはどうすればいいかは、相手と自分の好きな本の違いなどのある中で考えていくので、とても奥が深いと思った。僕も、最近はいぜんよりも読書量は増えたので、人に紹介するという切り口で考えながら読んでいこうと思った。

まず展望として、ミニビブリオバトルの形式（発表時間が3分の形式）にすることで、前年度の大きな課題であった生徒の達成感を担保することができたという点が挙げられる。A組の記録ノートから見て取れるように、時間内に人に本を勧めることの困難さを意識しつつも、「時間いっぱい、本について、自分の考えを話すことができる」楽しい活動として生徒は捉えていた。また、B組の記録ノートから見て取れるように、夏休みの課題として提示した「人に紹介する切り口で本を読む」という方略を、これから活用としていこうとする姿も見受けられた。

一方で予想外の課題は、夏休みの宿題にしたことで宿題を忘れてきてしまった生徒がそれぞれのクラスで少数ではあるがでてしまったことであった。忘れてくる生徒がいる班は活動の意欲がかなり低下してしまったように見えた。このことから、次年度行う際は長期休暇前に宿題として提示しないことを決めた。

2. 3 転換点の提示

平成26・27年度の実践では、主に生徒の反応から手応えを得ることができた。またその反応は、ビブリオバトルという活動が持つ特性（例えば、自分の好きなものを紹介するという楽しさ、それを聞く楽しさ、チャンプ本を決めるというゲーム性）に大きく起因しているのではないかという実感を得ていた。ただし、手応えや実感がある一方で、活動から生じる葛藤も感じていた。その葛藤とは、例えば平成26・27年度の実践が大きな単元の「繋ぎ」としてしか機能していなかったり、平成27年度のように活動を行う適切な時期を上手く設定出来ずにいたりしたという点である。

以上の葛藤を、抽象的なレベルで示すと次のようになる。「ビブリオバトルの活動が持つよさに依りつつも、国語科や学校という場で活動を行うことの意味を、より豊かな文脈で位置づけることができないものか」。

この葛藤を乗り越えるために、平成27年度9月から3月まで関連する文献や実践を渉猟した。その際に、転換点となる二つの文献に出会った。二つの文献とは、安居總子（1987）『授業開きの構造』、塚田泰彦（2014）『読む技術—成熟した読書人を目指して』である。ここからは、この

二つの文献の内容に沿いながら、転換点を提示することとしたい。

2. 3. 1 ビブリオバトルを生徒・教師共に意味のある「授業開き」として組織する

安居總子（1987）『授業開きの構造』は、平成28年度の年間の大きな流れを考えていた際に出会った文献である。この本は、国語科という教科でビブリオバトルを行うことの意味を、より豊かな文脈に位置づけるための指標になった。具体的には、ビブリオバトルが安居の示す三つの「授業開き単元の意図」を満たしうるものであり、国語科の授業開きの方法として可能性を持つもの、生徒・教師共に意味のある活動になり得るものであるという見通しを得ることができた。

安居は、「授業開き」の単元を流れる三つの意図として、「（１）出会いを大切にする（２）基礎的基本的な学習力を身につける（３）学習者の実態を知る」を挙げている。

稿者はビブリオバトルを授業開きの方法として用いることが、「（１）学習者と学習者の出会いを本を通して支援し、大切にすることができ、（２）話すことに関する基礎的基本的な学習力を身につけることができ、（３）指導者にとっては本や発表から学習者の実態を知ることができる」可能性があるという見通しを立て、平成28年度実践の生徒の目標や教師のねらいに活かすことにした。

そしてこのことは、前項で示した二つの葛藤、実践が大きな単元の繋ぎとしてしか機能していなかったり、活動を行う適切な時期を上手く設定出来ずにいたりしたという葛藤を解決するものであった。

2. 3. 2 「孤立した読書」からの脱却起点としてのビブリオバトル

塚田泰彦（2014）『読む技術―成熟した読書人を目指して』は渉猟している中で出会ったというよりも、繰り返しページを繰る中で、自身の実践との明確な接点を見つけた、という文献である。この本は学校という場でビブリオバトルを行うことの意味を、より豊かな文脈に位置づけるための指標になった。塚田は、ネット社会における伝達システムの変質という現実を踏まえて「読む力」を「テキストを通して筆者と対話する力であり、読むことは自らの手で意味を生み出す行為である。読者はこのことを自覚して、テキストから生成した意味を、批評意識をもって発信していく必要がある」（p. 188-189.）と捉え直す。その上で次のように語る。

現代の「孤立した読書」が、読むことに「意味」（＝社会的文脈）を喪失している事態を乗り越えて、その「意味」を回復するためには、読むことが発信型の生産的行為（＝意味を生み出す行為）となる必要があります。また、そのためには、その「行為としての読書」が、意味をやりとりするコミュニケーションの世界にしっかりと埋め込まれていなければなりません。

そこで、生き生きとしたコミュニケーションの世界を進んで回復しようとする意図をもって、読者自らが、筆者や編集者や書評者や図書館司書などのさまざまな役回りを演じながら、自分の読書世界を構築していく必要があります。（塚田、2014、p. 189）

稿者はこの「行為としての読書」を担保する場所の一つが、「学校」であると考えた。すなわち、学びのためのコミュニケーションの世界が担保され、異なった読書興味を持つ同年代の他者が集まる場であると捉えた。ビブリオバトルを行うことで「行為としての読書」の楽しさや重要

性を知ることができ、読者が書評者になることで自身の読書世界を構築するための手立てとして機能しうると考えた。

そして安居が示した授業開きの意図「(1) 出会いを大切にする」とも関わることだが、ビブリオバトルを授業開きで行うことが、クラスというコミュニティに重なる「読書コミュニティ」を構築するきっかけになり、それが生徒たちの読書に関するコミュニケーションを支えること、「孤立した読書」から脱却を図る起点を作ることができると考えた。これらの知見も先の『授業開きの構造』と同様に、平成28年度実践の生徒の目標や教師のねらいに活かすこととした。

3. 授業内容

これまでの展望と課題、転換点を踏まえて授業を実践した。項目を立てて、授業内容を詳述する。

I 単元名

授業開き—ビブリオバトルを通して人を、本を、これからの国語の時間を知ろう—

II 身につけさせたい国語の力（目標）

- これまでの読書経験を振り返ることで書評者として読書世界を再構築したり、クラスメイトの発表を聞くことで読書生活を豊かにしたりすることができる。(塚田の文献と関連)
- 異なる立場や考えを想定して、構成や展開を考えて話すことができる。(安居の授業開きの意図2と関連)
- 熟達者やクラスメイトの発表、既有知識を踏まえて目的に合った「効果的な伝え方」を言語化することができる。

III 教師のねらい

- ①学習者と学習者の出会いを本を通して支援する。(安居の授業開きの意図1と関連)
- ②話すことに関する基礎的な学習力を身につけさせる。(安居の授業開きの意図2と関連)
- ③教師が本や発表から学習者の実態を知る。(安居の授業開きの意図3と関連)
- ④「行為としての読書」の楽しさや重要性を知ることができるよう、クラスの豊かな読書生活を支える読書コミュニティを構築することができるよう支援を行う。(塚田の文献と関連)

IV 教材 ワークシート×2, ビブリオバトルのルールシート, ビブリオバトルの動画

V 授業の展開と指導の工夫

これまでの課題、転換点となった二つの文献を意味あるものにするために、指導の工夫という項を設けることとした。この項ではある学習が、どの項目で触れた課題と関わるのか、また転換点を経て変化した教師のねらいのうちどれに関わるのか記述することにする。

授業の展開		
時	学習内容（・），学習活動く活動形態	指導の工夫
第 一 時	1 本時の流れを確認する。〈一斉〉 2 教師に質問したいことを短冊に記入し，それに対する教師の回答を聞くことで，教師を知る。〈個人・一斉〉 3 一年間の授業のオリエンテーションを聞く。〈一斉〉（持ち物やノートの取り方，テスト，一年間を通してつきたい力を確認する。） 4 クラスメイトと本を知るために，ビブリオバトルを行う準備を行う。 ・基本的なルールを確認する。〈一斉〉 ・ビブリオバトルの動画を見て，ワークシートの問題に答えることで，効果的な伝え方（構成，話すスピードなど）を考える。	・発表3分のミニビブリオバトルを行うことを伝える。（26年度課題）
家庭学習	・選書を行う。 ・発表構成ワークシートに記入をし，発表の練習を行う。	・休暇前の課題にはせず，家庭学習を徹底させる。（27年度課題）
第 二 時	1 ビブリオバトルのルールを再確認する。 2 ビブリオバトルを行う。〈班活動〉 ・発表者は前時に学習した効果的な伝え方を用いながら発表をする。 ・聞き手は発表者の良いところを，効果的な伝え方を中心にメモする。 3 班のチャンプ本を決定し，クラス全体でそれぞれの班のチャンプ本を確認する。 4 ビブリオバトルをやってみて，効果的に伝えるために大事だと思ったことをまとめ，発表する。〈班活動・一斉〉 5 自身が選んだ本を短冊に記入し，提出する。（個人）	・学習者と学習者の出会いを本を通して支援する。（教師のねらい①） ・教師が本や発表から学習者の実態を知る。（教師のねらい③） ・声の大きさに気をつけて，座って発表することを伝える。（26年度課題） ・話すことに関する基礎的基本的な学習力を身につけさせる。（教師のねらい②） ・「行為としての読書」の楽しさや重要性を知ることができるよう，クラスの豊かな読書生活を支える読書コミュニティを構築することができるよう支援を行う。（教師のねらい④） ・話すことに関する基礎的基本的な学習力を身につけさせる。（教師のねらい②）
授 業 後	・クラスの全員の選書を参照する。	・「行為としての読書」の楽しさや重要性を知ることができるよう，クラスの豊かな読書生活を支える読書コミュニティを構築することができるよう支援を行う。（教師のねらい④）

VI 評価について

〈観点別評価基準〉

(国語への関心・意欲・態度)

関①これまでの読書経験を振り返ることで書評者として読書世界を再構築したり，クラスメイトの発表を聞くことで読書生活を豊かにしたりしようとしている。

(話すこと・聞くこと)

話①異なる立場や考えを想定して，構成や展開を考えて話している。

聞①熟達者やクラスメイトの発表を聞いたり，既有知識を踏まえたりして目的に合った「効果的な伝え方」を言語化している。

〈授業展開と評価基準〉

第一時…聞①【ワークシート】

第二時…関①【行動観察】，話①【行動観察・ワークシート】，聞①【ワークシート・定期考査】

4. 生徒の反応と授業の考察

生徒の反応を記録ノートの感想から引用し，展望と課題という形で授業の考察を行う。

〈平成28年度A組第二時記録ノート感想〉

今日はビブリオバトルを行ないました。友達の発表をきいていると，効果的に伝えるための工夫が沢山あることに気付きました。その本の魅力を伝えるのは，とても大変なことだけど，伝わると自分も相手も楽しい気持ちになります。このビブリオバトルという学習を今後の学習に活かしていけるように努力したいです。

〈平成28年度B組第二時記録ノート感想〉

私は今までずっと本をよむことは一人ですることだと思っていました。しかし，今回ビブリオバトルをやり，本を通して人と関わることができることを知り，実際にやってみることができました。これからは，一人で本を読むだけでなく，家族や友達と本について話したり，ビブリオバトルをしたりしてみたいと思いました。また，ビブリオバトルを通して「効果的な伝え方」も考えることができました。自分の発表をするだけでなく，他人の発表も聞くことで，新たに発見することも多くありました。今回の授業で，話す力（伝える力）はつけることが出来たと思います。なので，これからはそれ以外の聞く力等もつけることが出来るように頑張っていきたいです。

〈平成28年度C組第二時記録ノート感想〉

今日はビブリオバトルをやりました。「効果的な伝え方」というのがキーワードとして出ていたともいます。実際私は「効果的な伝え方」ができていたのでしょうか。自分のビブリオバトルを振り返ってみるとできていなかったと感じました。私が紹介した本を知っている人はいると思います。その人にどうやったら興味をもってその本を読んでもくれるのかとてもむずかしいと感じました。自分では当たり前になわかっていても相手は何も知りません。私の班でチャンプ本に選ばれた〇〇くんは，選書がいいだけでなく，原稿をずっと見ずに，関連する本も紹介していたので

選ばれたのだと思います。今回のビブリオバトルを通して本に対して興味を持つことができ、また、効果的な伝え方を学ぶことができてよかったです。これからの活動に活かしていければと思います。

展望として、ビブリオバトルが生徒にとって「楽しい」ものであるということを確認することから始めたい。A組の記録ノートを参照すると次のような感想を見て取ることができた。「(前略)本の魅力を伝えるのは、とても大変なことだけど、伝わると自分も相手も楽しい気持ちになります。このビブリオバトルという学習を今後の学習に活かしていけるように努力したいです。」このように、魅力を伝え・伝わる楽しさ、好きな本について話すことができる楽しさが、ビブリオバトルが生徒達に魅力的に映る要因の一つになっているという前提から他の展望について述べていく。

まず、「簡便で短い時間でできる」ビブリオバトルを「授業開き」の方法として用いることが有用であった点を指摘する。安居(1987)が提示した三つの意図に即して、実践を振り返ってみる。授業開きの第一の意図は「出会いを大切にする」であった。この意図を踏まえて、稿者は「学習者と学習者の出会いを本を通して支援し、大切にすることができると見通していた。B組のノートから分かるように、二年生になってクラス替えがあった生徒達が、自身の好きなものを楽しく伝え合う中で、「国語」という授業の中で本を通した新たな出会いを構築している姿を見て取ることができた。

授業開き第二の意図は「基礎基本的な学習力を身につける」であった。この意図を踏まえて、「話すことに関する基礎基本的な学習力を身につける」ことができると見通していた。本単位ではビブリオバトルの計画から発表に至る様々な場面で、発表の際の「効果的な伝え方」を生徒たちに考えさせた。この過程で、自身の既有知識を賦活したり、既有知識と比較したり、班やクラスで考えたりする中で、一年間を通して十分に発表を行うことができる基礎基本的な学習力(例えば、発表するときには声の大きさやスピードに気をつける、重要なことは先に提示するなど)を個人で、クラスで確認することができた。このことに関する生徒自身の振り返りは、A～C組の記録ノートから見て取ることができる。

授業開き第三の意図は「学習者の実態を知る」であった。この意図をふまえて、稿者は「指導者にとっては本や発表から学習者の実態を知ることができる」と見通していた。指導者は発表を通じて、そしてその後の選書リスト作成を通じて、生徒たちの読書生活の実態を知ることができた。また、稿者は生徒の発表時間中、生徒名簿にそれぞれの生徒の発表の特徴(例えば、適切な声量で発表ができる、発表に関して何らかの支援が必要など)を書き込み、生徒の実態把握に努めた。この際の資料は以降の授業計画や実践の基礎資料となった。以上三つの観点より、ビブリオバトルを授業開きの方法として用いることが有用であると結論づけたい。

そして、以降はビブリオバトルが授業開き以外にも、多様な意義を持つ活動であることについて二点言及したい。

第一に、生徒が「行為としての読書」に触れることができ、その重要性を感じることができたということが挙げられる。B組の記録ノートからその姿が見て取れる。該当箇所を引用しよう。

「私は今までずっと本をよむことは一人ですることだと思っていました。しかし、今回ビブリオバトルをやり、本を通して人と関わることができることを知り、実際にやってみることができました。これからは、一人で本を読むだけでなく、家族や友達と本について話したり、ビブリオバトルをしたりしてみたいと思いました。」記録ノートからは、記録を書いた生徒の読書観の転換を読み取ることができる。情報の消費的行為という読書ではなく、発信的型の生産的な行為（意味を生み出す行為＝行為としての読書）の重要性や楽しさを語っている。ビブリオバトルはこのような読書観の転換に関わり、「行為としての読書の重要性」に触れ、孤立した読書から脱却する機会になり得る。

第二に、ビブリオバトルが読書コミュニティの形成に役立つ、ということが挙げられる。これまでいくつか展望を示してきたが、その中でも特に、このことが重要な展望だと示したい。ビブリオバトル単元の最後に、クラスのメンバーが何を read したのか分かる選書リストを生徒たちに配布した。その結果、「ビブリオバトルの本、何 read した?」「どんな書評した?」「いいね、それ今度 read してみよう。」という会話がクラスの中で行われる様子を見て取ることができた。そして、別々のクラスの生徒が、廊下で同様の内容を話している様子も複数見て取ることができた。クラスの中はもちろんであるが、クラスの中で閉じず、学年まで広がる読書コミュニティ—読書という話題に関して関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的に相互交流して生み出し、共有し実践を深めていく学習者ネットワークを形成する第一歩を築くことができた。このことは先に示した「行為としての読書」に触れ、その重要性を感じることができるという展望とも大きく関わる。ビブリオバトルを通して形成された、消費的行為から生産的行為への転換に関わる読書コミュニティの姿を見て取ることができた。

なお、この読書コミュニティに所属するのは生徒に限られない。ビブリオバトルが終わった後、生徒から「先生、この本がおすすめなんです。読んで感想教えて!」と本を紹介される出来事が何度もあり、そこから生徒達との本に関するやりとりがはじまった。一年間の国語の授業のはじめにビブリオバトルを行った結果、読書コミュニティは各クラス、学年にまで拡大され、教師までもが含みこまれる形となった。学校組織に元々存在するコミュニティとは性質の異なるコミュニティ—読書を生産的な行為に位置づけるコミュニティ—が、多層的に形成され、その後の国語の授業や学校生活に影響を与える結果となった。

ここまで展望について記述をしてきたが、課題がないわけではなかった。まず、この単元を以降の読書指導に十分に活かすことができなかったという課題があった。理想であればこの単元で明らかになった学習者の読書生活を踏まえて、別の単元や学校生活でさらなる読書指導を行うことが考えられる。しかし非常勤講師という立場から、日常的に学校生活、その中でも読書生活に関わることができなかったことが反省すべき点である。そしてもう一つの課題は、授業者がすべての発表を、発表時間中に見ることができないという点である。これはビブリオバトルの性質上仕方のないことであるが、この課題を解決するためには、生徒間の相互評価を行うなど、工夫を凝らす必要があると考える。

注

- (1) 例えば、谷口（2013）は「大学，高校，中学校，小学校，書店，図書館，一般企業，地域イベント，就職活動イベント，商店街，留学生との交流，語学教育，そして一般家庭（家族内！）など数え切れない様々な場で利用されている。」（p. 17）と指摘している。
- (2) 本実践では、ウェンガー・マクダーモット&スナイダー（2002）が提唱した実践コミュニティを援用した秋田（2005）の読書コミュニティ概念を参考とし概念規定する。読書コミュニティとは、「読書という話題に関して関心や問題，熱意などを共有し，その分野の知識や技能を持続的に相互交流して生み出し，共有し実践を深めていく学習者ネットワーク」（p. 35）である。
- (3) ただし，木下（2016）のように，「クラス開き」としてビブリオバトルを用いている例は存在する。本実践の独創的な点をより詳述するならば，一年間の単元を志向して授業開きをすることに意味があるといえることができる。
- (4) 例えば，須藤・粕谷編著（2016）など。
- (5) 「記録ノート」とは，授業の内容（教師の発話，生徒の発話，授業の進行，授業のポイントなど）と授業の感想をまとめたノートのことである。筑波大学附属中学校では，毎時間どの教科でも，指名された生徒がその時間の記録ノートを作成している。本実践の主な考察の根拠となるのは，この記録ノートの授業感想である。記録ノートは誤字脱字等を含めて形を変えず，そのまま引用した。なお引用の際は，実際には存在しないアルファベットの組の名前を，分析上の仮の名前として提示することとする。
- (6) 「ビブリオバトルのルールシート」とは，ビブリオバトル普及委員会が公開している資料である。次のアドレスにある「biblio_tamalibrary.png」という資料を用いた。（<http://www.bibliobattle.jp/sozai-shuu>）
- (7) ビブリオバトルの内容を分かりやすく伝えるために，ビブリオバトル首都決戦2012の動画（<https://www.youtube.com/watch?v=AMSZxpuzuE0>）を用いた。この動画を用いることにした理由は，①発表者の発表が上手であり，年も近く生徒の参考になるため，②「はじめ・なか・おわり」をの構成を復習させるのに丁度よいため，③聞き取りの問題を作るのに丁度よいため，④ビブリオバトルが身近なところで行われていることを知ることができるため，である。

【引用・参考文献】

- 秋田喜代美（2005）「21世紀型読書コミュニティのデザイン」秋田喜代美・庄司一幸編『本を通して世界と出会う—中高生からの読書コミュニティづくり』北大路書房，pp. 28－44.
- ウェンガー，E.，マクダーモット，R. &スナイダー，W. M.（野村恭彦監，野村郁次郎解説，桜井祐子訳）（2002）『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社
- 木下通子（2016）「クラス開きでビブリオバトル」須藤秀紹・粕谷亮美編著『読書とコミュニケ

- ーション ビブリオバトル実践集—小学校・中学校・高校』子どもの未来社, pp. 100–105.
- 須藤秀紹・粕谷亮美編著 (2016)『読書とコミュニケーション ビブリオバトル実践集—小学校・中学校・高校』子どもの未来社
- 谷口忠大 (2013)『ビブリオバトル—本を知り人を知る書評ゲーム』文藝春秋
- 塚田泰彦 (2014)『読む技術—成熟した読書人を目指して』創元社
- 塚田泰彦 (2016)「読書の現在」『情報の科学と技術』第66巻, 第10号, pp. 508–512.
- 筑波大学附属中学校国語科 (2012)『音読・暗唱三〇選—声に出して味わう・楽しむ文学の世界』
- 安居總子 (1987)『授業開きの構造』光村図書